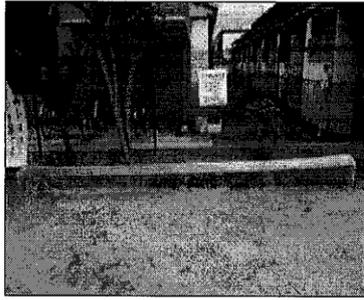


「太子田に残る樋門の跡」



前回紹介した大神社の境内の片隅に「八ヶ庄武拾箇村立會悪水落石門樋」と刻まれた細長い石材が横たわっています。この石材は、かつて当地の二十箇用水普通水利組合の悪水（排水）を寢屋川に排出するための樋門に用いられたものでした。二十箇用水普通水利組合は、豊臣秀吉の文禄堤築堤で淀川分流を断たれた友路岐庄6か村（現・寢屋川市）が淀川堤防に用水樋を建設したのが始まりで、後には現在の

大東・門真・寢屋川・東大阪市域にまたがる20か村が加盟するようになりまし。最盛期には水路延長約13キロメートルで、約7千ヘクタール（深北緑地約200個分の田地に水を供給し、当地の農業に欠かせない存在でした。大神社から80メートルほど東にある



大神社境内に横たわる石材

明福寺前の路地が、かつて樋門のあった場所、現在は樋門建設記念碑が立っています。記念碑には、江戸時代後期の弘化2年（1845）12月に樋門が開削され、安政5年（1858）2月には石材を用いるようになり、明治29年（1896）には寢屋川からの舟の出入りが可能となったことが刻まれています。

往時には樋門を通過して、収穫物や下肥（肥料用の人糞尿）などを積んだ舟が水路を行き交いました。通行の際には、水路と寢屋川の水位が異なるため、樋門の内側で水位を調節していました。長らく当地の農業を支えていた太子田の樋門は、昭和46年（1971）に埋め立てられましたが、今でも古堤街道の北側では水路の跡を見ることが



明福寺前の樋門建設記念碑

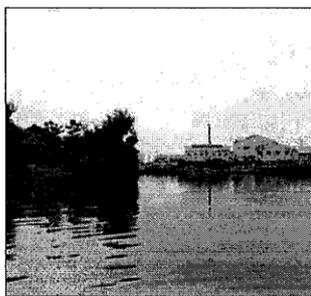
できます。樋門建設記念碑から東へ300メートルほど進むと赤井地区に入ります。次回からは赤井地区の歴史と文化財について紹介します。（生涯学習課）

「赤井と氷野」
「往古の水上交通の拠点」



前回紹介した「樋門建設記念碑」から東へ200メートルほど進むと、右手に老人ホームが、左手に水路の跡が見えてきます。この辺りは太子田地区と赤井地区の境界にあたり、かつては切前という小字名で呼ばれていました。

「切前」という地名は、江戸時代に付近の堤が切れて水害が発生したことに由来するといわれています。明治21年（1888）に町村制が施行されると、この地に大東市の前身である南郷村の役場が置かれました。役場があった場所は、先ほどの老人ホームの立っている辺りでした。明治23〜37年には、役場の隣に南郷尋常小学校（現在の南郷小学校）の校舎も置かれました。さて、ここからは赤井地区に入りま



昭和38年頃の氷野の淵
（現・氷野ポンプ場付近）

す。赤井は、江戸時代前期の万治元年（1658）に赤井村が成立するまで氷野村の一部でした。南北に接する赤井と氷野は、かつて「赤江」という地名で呼ばれていました。

平安時代前期に編まれた「類聚国史」によると、赤江は御厨といわれる皇室領に属し、地元で獲れた魚貝類などを献上していました。また、室町時代に摂津・河内地域に拠点を置いていた土豪・水走氏の記録には、「氷野河浮津」という船着場の名前が登場することから、赤井や氷野の辺りが、当時大東市域に広がっていた深野池の水上交通の拠点だったことが分かります。

赤井と氷野には、18世紀初めに深野池が新田開発された後も淵が残っており、昭和48年（1973）に淵が埋め立てられるまで寢屋川との間を小舟が行き交う水郷地域でした。

赤井地区に入ると、古堤街道は道幅が次第に狭くなり左右に蛇行するようになります。東に400メートルほど行くと、北野神社と泉勝寺が見えてきます。次回はこの2つの寺社について紹介します。（生涯学習課）